



うつしの詩學からゆらぎの詩學へ（下）：
神韻説再考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011094

うつしの詩學からゆらぎの詩學へ（下）

——神韻說再考——

大 平 桂 一

五、錢謙益との遭遇

錢謙益（一五八二—一六六四）は江蘇常熟の人。字は受之、號は牧齋。明萬曆三十八年の進士。明季に禮部尚書となり、ついで清に降って禮部侍郎となった。東林黨の大立者として聲望厚く、また「巨公」として長きにわたり文壇の動向を左右した。明滅亡後、彼は詩のアンソロジーの形をとりながら、明の政治・社會史をも包含した問題の書『列朝詩集』を完成し、衝撃をあたえた。『列朝詩集』の出版と錢謙益との出會いは王漁洋の詩學の形成に大きな影響をもたらした。

五―一、列朝詩集

錢謙益の『列朝詩集』が出版されたのは、順治九年、王漁洋は時に十九歳、すでに舉人の資格を得ていた彼は、この年會試

を受けて下第した。『列朝詩集』は先に觸れたように、詩を以て明一代の歴史を語らせようとした書物とされ、乾集（帝王・王族）甲集乙集丁集（士大夫）閩集（僧侶・道士・女性・外國人等）からなる全十一巻の大規模なもので、作者一人一人に小傳が附されている。錢謙益は小傳の中で實に重要な發言を行なっていて、小傳だけを取り出した『列朝詩集小傳』という本が編纂された程である。東林黨の領袖にして著名な文學者であった錢謙益の名聲もあり、出版後は争うように讀まれたらしい。王漁洋もまた熱心な讀者であつたことは、乾隆年間に彼の著作から抜き書きしてまとめられた『帶經堂詩話』に散見する記事によつて明らかである。

錢牧翁の列朝詩を撰ぶや、大旨は李西涯を尊びて、李空同李滄溟を貶めるに在り。又空同に困りて大復に及び、滄溟に困りて弇州に及ぶ、垢を索め癩を指して、餘力を遺さず。…録

する所の空同集詩は、亦た其の傑作を浪ぼすこと多し。

(帶經堂詩話卷二 評駁類所引居易易錄)

他の箇處とあわせ見れば、王漁洋が『列朝詩集』の記事をいかに綿密に検討していったかがよくわかる。彼が真先に注目したのは、自分の宗族の記事を除けば、もちろん古文辭派の條であつただろう。

(李)夢陽、字は獻吉、慶陽の人、大梁に徙る。弘治癸丑の進士、戸部主事を授かり、員外に遷りて三倉を監す。；獻吉は休明の代に生まれ、雄鷲の才を負い、偶然として漢の後に文無く、唐の後に詩無しと謂いて、復古を以て己の任と爲す。信陽の何仲默(景明)起ちてこれに應ず。時自り厥の後、齊呉代興し、江楚特起するも、北地の壇坫は改たまらず、近世耳食する者は、唐に李杜有り、明に李何有り、大曆自り以て成化に迄ぶ、上下千載、餘子無しと謂うに至る。嗚呼、何ぞ其れ諱れるや。何ぞ其れ陋なるや。其の實を夷考し、平心もてこれを論ずるに、本朝の詩由り、溯りてこれを上るに、格律差や殊なり、風調各おの別るるも、興會を標舉し性情を舒寫すること、其の源流は則ち一なるのみ。獻吉の復古を以て自らに命じて曰く、古詩は必ずや漢魏、必ずや三謝、今體は必ずや初盛唐、必ずや杜、是れを舍つれば詩無きなり。牽率し

て聲句字の間に模擬剽賊すること、嬰兒の語を學ぶが如く、桐子の洛誦するが如く、字は則ち字、句は則ち句、篇は則ち篇、毫も其の心の有る所を吐くこと能わず、古の人も固よりはくの如きか。天地の運會、人世の景物、新新として停まらず、生生として相い續くに、必ず漢の後に文無く、唐の後に詩無しと曰わば、此の數百年の宇宙日月は盡く皆缺陷晦蒙にして、直だ獻吉を待ちて洪荒再び闢くならんや。獻吉曰く、唐以後の書を讀まずと。獻吉の詩文は、唐以前の書を引據するに、紕繆挂漏は、一にして足らず、又何をか説かんや。

長々と引用したのは、錢謙益の古文辭派批判のスタイルを知つていたできたかつたからである。李夢陽が熟讀しているはずの「唐以前の書」を引用する際にまちがいが多い、というのが新鮮なだけで、あとは拙論(上)で紹介した何景明の論難の枠内にあると言つてよいだろう。ついでに李夢陽の實作に基づいた批判がないことも指摘しておきたい。錢謙益は最後の打撃を與えるべく愈いよ筆鋒を鋭くする。

國家日中月滿に當たり、盛極まり孽衰す。麤材笨伯、運に乗じて起ち、詞盟を雄霸し、譎種を流傳す。二百年以來、正始淪亡し、榛蕪路を塞ぎ、先輩の讀書の種子は、此れ従り斷絶す、豈に細故ならんや。後に能く偽體を別裁すること、少陵

の如き者有らば、殆んど必ず斯の言を以て然りと爲さん。是を以て罪を世の君子に獲るも、則ち吾が惜しむ所に非ざるなり。

古文辭の方法が、讀書する氣風を斷ち、國家衰運の一つのあらわれとなつた、というのは鄭聲が亡國の音であると斷定する傳統的な詩學の見解をひきついだもの。『列朝詩集』で明の亡國と關連づけて論じているのは、竟陵派とこの古文辭派だけである。この部分は、明末すでに歸有光等の散發的な批判を浴び始めていた古文辭派の後裔達に大きなダメージを與えた。李夢陽と何景明の應酬が私的な書簡で行なわれたのに對し、錢謙益の斷罪はその論争を取り入れた上で、ベストセラーとなつた書物に於いて爲されたため、漁洋の受けた衝撃は大きかつたであろう。つづいて李攀龍の項も見ておこう。

李攀龍は李夢陽と比較すると、理論・實作ともに攻撃しやすい相手、「柔らかな下腹部」であつて、ほぼ倍の紙幅がとられている。錢謙益による古文辭派批判の中心は、李攀龍の小傳に在つたと言える。

攀龍、字は子鱗、歷城の人。嘉靖甲辰の進士。刑部廣東司主事を授かり、郎中を歴て、出でて順徳府に知たり、陝西提學副使に擢んでらる。西土の數地を動くに、心悸して母を念ひ、

うつしの詩學からゆらぎの詩學へ（下）

疾を移して歸る。何景明の例を用つて、予告凡そ十年、浙江副使より起り、參政に遷り、河南按察使を拜す。母の喪に歸り、小祥を踰えて、心痛を病みて卒す。…其の秦中自り挂冠するに及びて、白雪樓を鮑山華不注の間に構え、杜門高枕、聞望茂著す。時自り歐の後、海内文章の柄を操つること二十二年に垂んとす。其の徒の推服する者は、以謂く上は虞似を追い、下は漢唐を薄んずと。有識者は心にこれを非とし、叛者は四もに起こるも、聲に循いて贊誦する者、今に迄びて百年、尚お未だ衰止せず。その譏著を要するに、得て評隲すべきなり。

李攀龍が文壇を牛耳ること二十年、批判者はかなり出現したが、その後百年にもわたつて追隨者は消滅しない。よろしい自分が彼等を精算してやろうではないか。第一の攻撃の目標は、文學史上の椿事とされた李攀龍の古樂府模擬であつた。その實態については、たとえば吉川幸次郎先生の『元明詩概説』二百頁を参照されたい。六朝の模擬詩に見られるような文學批評の觀點等たえてない、「ほとんどそのままのひきうつし」（同書二百一頁）であることは誰の目にも明らかであつた。

其の古樂府を擬するや、當に胡寬の新豊を營みて、鷄犬も皆其の家を識るが如くすべしと謂えり。寬の營む所は、新豊な

り。其の阡陌衢路は未だ改まらず、故に寛は得てこれを貌かたどるなり。改めて商の毫周の鎬を營ましむれば、我は寛の必ずや手を束つかぬるを知るなり。易に擬議して以て其の變化を成さしむと云うも、擬議して以て其の臭腐を成さしむとは云わざるなり。五字を易かえて翁離と爲し、數句を易かえて東門行と爲す。戰城南は思悲翁の句を盗みて、鳥子五烏母六と云い、陌上桑は孔雀東南飛の詩を竊みて、西鄰の焦仲卿、蘭芝道隅に對すと云う。影響剽賊、文義違反す、擬議なるか、變化なるか。

呉の陋儒に石鼓文を補う者有り、逐鼓支綴し、篇什完好なり。余これに恭かしえて曰く、此れ李于鱗の樂府なりと。其の人は矜喜し、死に抵るも悟らず、此れ切喩爲るべし。

李夢陽を批判していた時よりも筆が走っていることがおわかりであろう。この中で錢謙益が一番攻撃したかったのは、「擬議して以て其の變化を成らしむ」(易・繫辭傳上)である。李攀龍は古代の詩文を徹底的に模擬することによってこそ、それらが本来持つていながら開花しなかつた可能性を全て引き出すことになる、と讀みかえて自らの理論の根本原理としたのであったが、錢謙益はそれを「擬議して以て其の臭腐を成さしむ」と組みかえ、模擬することによって、古代の詩文に表面上あらわれていなかつた缺點が浮き出てきて、模擬者の作品に於いてそ

れが完成すると嘲笑している。また「呉の陋儒」が書いた「補石鼓文」を、「此れ李于鱗の樂府なり」と評しているのは注目値する。「李于鱗」が否定的なニュアンスで使用される文藝用語に轉化する先驅けであり、更には王漁洋までが「清秀なる李于鱗」と罵しられるに至るからである。錢謙益はつづいて李攀龍の詩に「百年」「萬里」と言つた空疏な言葉が連發され、詩の表現が大きなものになる、これを果して詩と呼べるのだろうか、と指彈した後でいよいよ最終判決を下す。

今人于鱗を尊奉して擬議變化の説を服習し、自ら謂いわえらく、古選よめばに沂よめばり初唐に沿ひ、淄澠を區別し、要眇を窮極すと。通人よ自りこれを視れば、正に嚴羽卿の所謂いわゆる下劣詩魔の其の肺腑に入る者なり。斯文未だ喪なわれず、來者は誣し難し、葵丘震驚の日に當り、仲蔚已に違言有り、稷下銷歇の時に迨びて、元美も亦た異議を持せり。而して王元馭弁山續稿に序して歷下を詆訶し、三十年に及ばずして水落ち石出でて、索然として見えざらんと、其の斯れ有るは、固より兪州の緒言なるも、抑も亦た藝苑の公論なり。然らざれば、余も亦た豈に于鱗に私憾有りて、世の于鱗を祖述する者と、黨枯れ仇朽ち、曉曉然として置かざること此くの若くならんや。

このようにして、古文辭派は存立基盤を失なつてしまつたわけ

である。この評價は私的なものではなく、天下の公論だとまで念を押している。ここで李攀龍の小傳は終わっているのであるが、あきたらなく思ったのか、錢謙益は王承甫が屠青甫に宛てた書簡を引き、とどめをさそうとする。その中に出てくる「海陵生」なる人物作のパロディはまさに抱腹絶倒である。

海陵生嘗て其の語を借りて漫興を爲りてこれに戯れて曰く、
萬里江湖^{はま}迢かに、浮雲處處に新たなり。詩を論じては落日を
悲しみ、酒を把りては風塵を嘆ず。秋色は眼前に滿ち、中原
は望裏に頻る。乾坤吾輩在り、白雪斯の人を誤まらず。云云。
大いに絶倒するに堪えたり。

海陵生の作品は、「萬里」「江湖」「浮雲」「落日」「秋色」「風塵」「中原」「乾坤」等李攀龍の詩に頻出する語彙を並べただけで出来上がっていて、強烈な皮肉になっている。錢謙益は小傳で李攀龍を理論的にたたき、この書簡を引用することによって彼を笑いのめしたわけである。錢謙益の昔烈な批判は古文辭派の文學運動やその周邊にいた膨大な數の凡庸な詩人達に深刻な打撃を與え、「以後今に至るまで評判がよくない。彼らの全集は、今やおおむね忘れられた書物である。」(元明詩概説二百十三頁)という有様になった。

王漁洋は山東の片田舎でこの『列朝詩集』をくりかえし讀ん

うつしの詩學からゆらぎの詩學へ(下)

だに違いない。古文辭の大立者の何人が山東の人間であり、彼の一族にもその文學運動にかかわった人間が多く、彼自身古文辭の方法によって詩作を學んでいたわけで、受けた傷は深かったのである。彼と錢謙益の縁は、書物の著者と讀者の關係にとどまらなかった。彼等は數年後に師弟の間柄になったのである。

五―二、錢謙益との邂逅

順治十八年、揚州府推官の任に在った王漁洋は、詩集を攜えて常熟に隱棲していた錢謙益のもとを訪れ序文を請うた。當時新進の詩人としての名聲を確立していた彼の要請を錢氏は快諾した。

予初め詩を以て虞山錢先生に贊す。時に年は二十有八なり。先生は一見して欣然として爲にこれに序す。又長句を贈り、其の詩を采りて撰する所の吾彖集に入れたり。題拂してこれを揚詔する者、至らざる所無き所以なり。今五十年に將^{なん}んとし、往事を回思するに、眞に生平第一の知己なり。

(漁洋山人自訂年譜に引く魚子亭雜錄)

二人は會うと同時に漁洋の一族で錢氏と同年の進士王季木象春の話をきっかけとして文學の話に入っていたであろう。漁洋

は『列朝詩集』を熟讀していたから、話題は自然に明一代の詩史を中心に盛り上がったにちがいない。錢謙益は心のこもった序文一篇と、五言長篇一首を王漁洋に贈っている。序文はまず同年の進士三人の思い出話にはじまる。

萬曆庚戌の歲、余と偕に南宮に擧げられし者、關西の文太青、新城の王季木、竟陵の鍾伯敬、皆雄駿の君子にして、鞅を詞壇に掉ぐ。

この三人の中で、前の二人は古文辭派、鍾惺だけが獨自の道を歩み、人々の注目を集めて、今に至るまで輕薄な人間がかついでいる。文・王の二人は、彼とそれ程實力が違うわけではないに、地方的な詩人にとどまってしまったのは運不運があるのだろうか、とつづいた後でいよいよ王漁洋登場である。

季木歿して三十餘年、從孫胎上、復た詩名を以て鷓起し、閩人林古度其の集を論次して、季木を推して先河と爲し、家學門風淵源自る有りと謂う。新城の壇墀大いに聲銷灰燼の餘に振い、竟陵の光燄は熾きたり。余蓋しこれが爲に卷を撫して太息し、文苑の乗除、劫運其の間に參錯する有りて、殆ど亦た以て天咫を觀るべきを知るなり。

ここでは王漁洋の登場を祝っているわけだが、やはり氣になるのは林古度の言葉として引かれている「季木を推して先河と爲

し、家學門風淵源自る有り」である。君はあの古文辭派であつた王季木象春君の從孫として、古文辭一邊倒の家學を繼承して文學修行してきたのではないのか、と言っているように思えてならない。というのもこの直後に古文辭派への強烈な攻撃が待っているからである。

嗟乎、詩道は淪胥し、浮偽並び作る。其の大端に二有り。古を學びて贗なる者は、滄溟弁山の臙語を影掠し、尺寸をも比擬す、此れ屈歩の蟲の、條を尋ねて枝を失う者なり。心を師として妄なる者は、品彙詩歸の流弊を懲創し、眩運掉擧す、此れ牛羊の眼の、但だ方隅を見る者なり。この二人は、其の詩論は區して以て別つべくも、古學の繇來を知らず、自らはとするに勇ましく、昔を侮どるに輕がるしきは、則ち亦た同に狂易に歸するのみ。

古文辭派と竟陵派を、「古學の繇來を知らず、自らはとするに勇ましく、昔を侮どるに輕がるし」という理由でともに斥けているが、錢謙益の詩學の立場は、過去の作品を懸命に學ぶだけでは駄目であり、心に思いついたことをそのまま書きつづつても、それは詩として認められない、この一點にある。

胎上の詩文は、文繁く理に富み、華を衞み實を佩ぶ。感時の作は、杜陵に側愴し、緣情の什は、義山に纏綿たり。：平心

易氣、耽思旁訊、深く古學の繇來を知り、前の二人の爲すに於いて、皆能く其の癥結を洩汰し、其の嘈噴を祓除す。思ひ深きかな、小雅の復た^た作るや、斯の人微^なかりせば其れ誰か^と歸せん。

自分の後繼者は君だ、だがそれには條件がある。古文辭・竟陵のそれぞれの行き過ぎを正す、第三の道を歩まねばならない、錢謙益は王漁洋が古文辭の學統に属する人であつたせい、このことを繰り返して語つてやまない。序文は更に自分と王象春の交誼を述べ、その從孫王漁洋が古學の由来を知る新進の詩人として登場したのを親しく目撃できたことの慶びを記して終わる。王漁洋は巨公錢謙益に弟子の禮を執り、詩集の序文を書いてもらつたことにより、もはや「家學」である古文辭の理論・方法を前面に押し出すわけにはいかなかつた。王漁洋はこの序文の公理系の中で自らの詩論を組み立てて行くことになる。それほど錢謙益との邂逅は大きな意味を持っていたのである。

六、うつつの詩學からゆらぎの詩學へ

王漁洋は、例えば、『滄浪詩話』のような詩學の理論書を書いたわけではなく、彼の詩論を考える際には、乾隆年間王漁洋が夢枕に立つ程傾倒した張宗柎が編んだ『帶經堂詩話』による

うつつの詩學からゆらぎの詩學へ（下）

のが普通である。さらに通常の方法をとるならば「神韻」とか「興會」といった用語の用例をあつめてきて、「神韻」とは何か、「神韻説」の本質は、といった問ひかけのスタイルをとるのであろうが、そのようなやり方はここでは選ばないことにした。どのような過程を経て詩とよべる作品ができるのか、あるいは人はいかにして詩人たりうるのか、どのような修行の階梯が必要なのか、といった素朴で根源的な問題に對して王漁洋がどう答えているか、あるいは答えていないのか、それだけを考えてみたい。

『帶經堂詩話』は、後世の人が彼の著作からぬき書きしたものを分類整理したという性格上、創作理論から自らの回想、詩人の逸事や雑多な考證に及ぶ大部な書物であるが、次の一條は非常に注目に値する。

夫れ^そ詩の道には、根柢有り、興會有るも、二者は率^{かむ}兼ねることを得べからず。鏡中の象、水中の月、相中の色、羚羊角を挂くれば、跡の求むるべき無し、此れ興會なり。これを風雅に本づきて以て其の源を導き、これを楚騷漢魏の樂府詩に^{まかの}派^{まかの}ぼりて以て其の流れを達せしめ、これを九經三史諸子に博めて以て其の變を窮む、此れ根柢なり。根柢は學問に原づき、興會は性情に發す。斯の二者に於いてこれを兼ね、又幹とす

るに風骨を以てし、潤おすに圓青を以てし、諧まえるに金石を以てす。故に能く華を銜くみ實を佩くび、大いに厥その詞を放てば、自ら一家として名だたるべし。

(帶經堂詩話卷三眞訣類所引漁洋文)

「根柢」とは詩にそれらしい形式を與えるための學問を指す。詩材・詩語・詩律・論理などから成り立つてゐる。これは過去に書かれた作品に似せるための詩學であるから以後これを「うつしの詩學」とよぶこととする。「興會」とは、詩人に作品を書くに至らせるインスピレーションであつて、やがてそれは讀者の心にゆらぎの感覺をもたらし、詩人との共振關係に入らせる。というわけで「興會」の部門を以後「ゆらぎの詩學」とよぶこととする。

漁洋のこの文章では「うつし」と「ゆらぎ」が併列され、この二者を兼ねるのが理想であると書かれてゐる。錢謙益によつて「うつし」だけでもいけないし、「性情」だけに忠實に詩作をしてもいけないという梓をはめられたために両者を兼ねる發想が出てきたのだろう。しかし私見によれば、兩者の間にはおそらく儼然とした順序が存在している。『滄浪詩話』の詩辨には次のように言う。

夫れ詩には別才有り、書に關するに非ざるなり。詩には別趣

有り、理に關するに非ざるなり。然れども多く書を読み、多く理を窮むるに非ざれば、則ち其の至を極むること能わざるなり。

この條が王漁洋の文章に影響していることは明白で、此を以て彼を推せば、「うつし」から「ゆらぎ」へという道筋が見えてくる。また王漁洋の出發點が古文辭の方法であつたことを考えあわせると、「うつし」が先に來るとするのが妥當である。この問題はもう一度論ずることとして先を急ごう。

六一、うつしの詩學

特別の才能を持つわけではない普通の人間が、鑑賞に耐える作品を書くにはどうすればよいか。まず詩の外見が過去の傑作とされる作品に似なければならぬ。ここまでは古文辭的な發想であるが、漁洋のうつしの詩學ではさらに作品の聲律が古典と一致することが要求されている。そこで外側のうつしと内側のうつしの二つの角度からうつしの詩學を觀察してゆくことにする。

六一——一、外側のうつし

『帶經堂詩話』自述類は次のようなエピソードから始まる。

予幼くして家塾に入り、肄業の暇、即ちただに私ひまに文選唐詩を取りてこれを洛誦す。これを久しくして五七字の韻語を爲るつくを學ぶ。先祖方伯府君、先嚴祭酒府君これを知るも禁おしぜざるなり。時に先長兄考功始めて諸生と爲り、詩を爲るを嗜む。予の詩を見て甚だ喜び、劉頃陽先生編む所の唐詩宿中の王、孟、常建、王昌齡、劉眘虛、韋應物、柳宗元數家の詩を、手ずからこれを鈔うつさしむ。(帶經堂詩話卷七自述類上所引居易錄)ここから浮かび上がってくるのは、過去の詩人達の傑作・佳句をひたすら書き寫す少年の姿である。日本にも作家になろうとして志賀直哉の小説を原稿用紙に丁寧ていねいに書寫した人がいたらしいが、王漁洋と同じような文學修行法であろう。この習慣は死去する直前までつづいた。

是の歳予は年七十有五、篤老せり。日は昏眊こもして、書を視ること能わず、唯だ大字本のみ略ぼ辨識すべし。偶たまたま案上に宋洪景廬氏萬首絶句の舊板本有り、乃ち日ひびに取りてこれを讀み、兩月にして畢れり。是に於おいて其その尤まれる者ものを撰録すること凡そ九百餘首、以て文粹詩選の後を繼がんとす。

(帶經堂詩話卷七自述類上所引蠶尾續文)

このような勉強の成果として、古詩選・唐賢三昧集・唐人萬首絶句選等の總集が續々と出版されていった。公開された成果以

うつしの詩學からゆらぎの詩學へ(下)

外にも、王漁洋はおびただしい量の讀書ノートを作っていたらしい。學習の範圍は唐代にとどまらず、宋金元明、ひいては同時代の詩人に及んでいた。

淮陰の張養重虞山、浙東に遊び、廣陵に過りて余に謁す。揖げ甫はめて罷るや、余亟すまやかに問いて曰く、夙ふに足下の南樓の楚雨 三更に遠く、春水 吳江 一夜に生ずを愛す。平生かくの如き好句復た幾ばく有るやと。張退きて邱洗馬季貞隨象に謂いて曰く、夙昔快意の作、意おもわざりき阮亭一見して便ち能く道出するとはと。(漁洋詩話卷上)

王漁洋は張養重のような小詩人の作品にいたるまで満遍なく勉強し、佳句を書き留めていたわけである。これが自分の氣に入つた詩人ともなれば執心の程はすさまじい。

予施愚山侍讀の五言詩を讀み、其の溫柔敦厚を愛す、一唱三嘆、風人の旨有り。其の章法の妙は、天衣無縫の如く、園客獨繭の如し。約略にこれを擧ぐれば、「別緒は理おむるべからず、酒は盡く暮江の頭」「人日 日は初めて晴れ、朔風 一夜至る」「月明らかにして遠近無く、枕に依りて寐ぬること能わず」の若き數篇是れなり。清詞麗句に至りては、疊見層出す。予嘗て張爲主客圖の例に仿いて、其の尤なる者ものを摘みて列べて以て圖と爲し、康樂の「池塘春草を生ず」、玄暉の「澄江淨

きこと練ねりぬの如し、仲言の「露は溼らす寒塘の草、月は暎やず清淮の流れ」と并せて藝苑の談助に資せんと欲す。或るひと予を詰なぐりて曰く、詩を論ずるに固より摘裂すること此くの如くすべけんやと。予曰く、謝公子弟と毛詩何れの句か最も佳なるやと論じ、或ひと楊柳は依依たり、雨雪は霏霏たりを擧ぐ、公は訐謔命を定め、遠猶辰を告ぐに如かずと謂いて、雅人の深致有りと爲す。夫れ三百篇すら尚お然り、況んや騷選以下をや。因りて摘句圖を作る。(池北偶談卷十二)

以下に八十一聯の對句が擧げられている。施愚山こと潤章は北施南朱と稱された詩人で、王漁洋の友人であつた。王漁洋は施潤章の詩を愛好するあまり、その詩集からぬき出した對句で「摘句圖」を作成した。彼が同時代の詩人の動向にいかに關心をもつていたかを知ることができるとともに、一篇の詩をまとまつた全體として讀もうというのでなく、バラバラに解體し、他の詩人の佳句と同列に扱おうという態度が見える。「摘句圖」に擧げられた施潤章の佳句はどんなものであるかというのと、「竹色は翠にして屋に連なり、林香は清くして山に滿つ」、「潭煙は檻に依りて集まり、山色は溪を度りて來る」、「暮煙は野に隨いて濶く、山翠は江に入りて明らかなり」等々どれを取つても王漁洋自身の作品によく似た雰圍氣を持ったものばかりで、佳句

のデータベースといった趣きがある。データベースを蓄積する話は『帶經堂詩話』に何箇處も見出せるが、次のエピソードも興味深い。

偶たま朱錫鬯太史錫鬯の爲に宋人の絶句の唐賢を追跡すべき者を擧げて、數十首を得、聊か此三に記す。亭亭たる畫舸 春潭に繋ぎ、只だ待つ行人の酒半ばたな酌たくわなるを。煙波と風雨に管わらず、載するに離恨を將つて江南を過ぐ云々。

(池北偶談卷十九)

王漁洋にとつてはもはや唐宋の粹は存在しない。彼のデータベースの中では、作者名も作品名も、それらが作られた朝代名もまつたく問題にされない。引用に出てきた絶句以外にも、「來時 秋雨は江樓に滿ち、歸日 春風は客舟を度る。首を回らす 荆南天の一角に、月明らかに笛を吹いて揚州に下る。」「自ら愛す新詞の韻最も嬌なるを、小紅は低唱し我は簫を吹く。曲終わりて過ぎ盡くす松陵の路、首を回らす煙波十四橋。」といった具合に五言・七言の違いはあつても先の施潤章の佳句と寸分たがわぬ雰圍氣の作品がずらりと並んでいる。

王漁洋はこのように生涯讀書を廢することなく、佳句傑作狩りともいふべき作業をつづけ、詩作の資料としていた。もちろんそれらは二次的には總集、選集及び隨筆の材料として利用さ

れたが、第一義的には詩作として結晶したのである。

六一―一二 内側のうつつ

先に述べたように、王漁洋は一貫して過去あるいは同時代の詩文集から佳句をかりとり、そのデータベース・貯蔵庫といったものを作りあげていたが、それだけでは古典的な詩は成立し得ない。外側の表現が古典的な雰囲気を持つと同時に、内側の聲律も古典詩に一致しなければならない。そのため彼は異例とも思える情熱を傾けて聲律學の確立に努めた。

中國古典詩の聲律は唐代に完成し、宋代はともかくとして、元明と降るにつれて現代では常識とも思える聲律の規則があまりになつてゆき、清初の王漁洋の時代にはかなり怪しい状態におちいつていた。否、現代の我々が古典詩を中國の研究者とやりとりする場合にも、彼等の中に下三平はおろか二四不同二六對の原則すら知らないのではないかと思われる人もいる。筆者自身、律詩奇數句の終わりを平字にしてしまったなんてのは朝飯前、孤平・孤仄すら點檢からまれ、相手に送ってから大いに慌てた事があつた。この話にはオチがあり、相手が私家版の詩集を出版した時に筆者の贈答詩も附載され、きれいに該當箇處が添削されていたのである。閑話休題、王漁洋はこのような

うつつの詩學からゆらぎの詩學へ(下)

聲律上のゆるみをひどく嫌い、古典詩の作例から一つ一つ法則をあらためて歸納していった。彼の聲律學の全貌を見るに足る書物はないが、幸いなことに『律詩定體』と『王文簡古詩平仄論』が残っているので彼の學問の一端を窺うことができる。

『律詩定體』が王漁洋の著作であることは認められているが生前に刊行されたものではなく、嘉慶年間の花薰閣詩述に収められたのが最初である。洋裝本で三頁に過ぎない短篇であるが、近代の律詩の聲律學の先鞭をつけた名著とされる。その理論の要は、五言仄起不入韻の記述にみられる。

五律、凡そ雙句(偶數句)の二四(二字目と四字目)應に平仄なるべき者は、第一字は必ず平を用い、斷じて雜うるに仄聲を以てすべからず、平平を以て止だ二字相連なること有らしむるのみにして、單ならしむべからざるなり。其の二四應に仄平なるべき者は、第一字平仄皆用うべし。仄仄仄三字を以て相連ぬるも、換うるに平韻を以てすれば妨げ無きなり。大約仄は平に換うべく、平は斷じて仄に換うべからず、第三字も此に同じ。單句の第一字の若きは、論ずること勿かるべし。

一言でまとめるとすれば、「律詩に於いては極力平字の孤立―孤平―を避けるべきである。」となろうか。つまらぬ、常識的

だといってしまえばそれまでであるが、「一三五は論ぜず」という當時の士大夫の常識を覆えずに足る「孤平」の再發見だと言つてよい。郭紹虞氏によれば、清以後律詩の聲律研究は、王漁洋の説の範圍を出ないとされる。

さらに重要なのは、言うまでもなく、『王文簡古詩平仄論』である。これが王漁洋のオリジナルな研究であること、その中で立てられている法則が、彼の詩作に概ねあてはまることは、すでに拙論「王漁洋の古詩平仄論」で論じたが、本稿では彼の詩論の一部としての古詩平仄論の意味を考えてゆきたいと思う。

律詩だけでなく、唐宋の人々が書いた古詩にも平仄の法則があるらしいという推定は明人によつてすでになされていたが、それはつきりまとめあげた人間はいなかつた。王漁洋は、律詩の場合と同じように、自分の書く古詩は表現の面だけでなく、聲律の面からも古人の作品と合致していなければ、「詩」として成立しないと考えた。律詩の場合とは比較にならない程の精力を傾けたその作業の大方針は「律詩にちよつとでも似てはいけない。」というものであつた。歸納された法則を繁を厭わずに左に擧げておく。

平韻到底七言古詩について

(1) 出句（奇數句）の第五字目は仄字を用いる。平字を用いた

ら第六字目が仄字になる。

(2) 出句の第二字目は平字を用いる。

(3) 落句（偶數句）の第五字目は必ず平字を用いる。第五字目が平字なら、第四字目は必ず仄字になる。

(4) 落句の第五字目、第四字目の平仄が合えば、第二字目は平字でも仄字でもよいが、平字を使う方がよい。

(5) 落句は下三平にするのが標準である。

平韻到底七言古詩について

(6) 出句の第二字目と落句の第二字目、出句の第五字目と落句の第五字目、この二組のペアのうちに、最低一組に平仄の對立が必要である。

このように王漁洋は生涯にわたり、まことに複雑な法則に従つて七言古詩を作りつづけたのであり、その成果をごく少數の門人に傳えたが、完全に公開することはなかつた。その間の事情は趙執信の『談龍錄』に詳しい。

阮翁の律調は、蓋しこれを受くる所有らん。而るに終身自ら所を言わず。其の以て人に授くるや、又盡くすを肯んぜざるなり。始めこれに従いて學ぶ者有り、既に名を得ては、轉じて其の説を以て人に驕り、己の失調有るを知らざるなり。

余既に竊かにこれを得たり、阮翁曰く、子妄りに人に語るこ

と母かれと。余おのれ以もつ爲ならく是を知らざる者は、固まことより未いまだ詩を能くすると爲さず、僅かに失調無きのみにして、これを詩を能くすると謂いて可ならんやと。故に輒ついでち以て人に語りて隠すこと無し。然れども信ずる者を見ること罕なり。

古詩平仄論をめぐって大變なドラマが展開されたものだ。「余既に竊ひそかにこれを得たり」をある人は「余既に竊ひそみてこれを得たり」すなわち趙執信が王漁洋の書齋に忍び入つてくすねて來たと穿つた解釋をしたが、この文章にはそれを許す一種の妖氣がただよつてゐる。

趙執信はおそらく獨自在唐宋の詩を精一杯勉強して古詩平仄論を立てたに違いないが、彼の理論と王漁洋の理論とはかなりくいちがつてゐる。これはおそらく以下のことを意味するであろう。もともと唐宋の詩人等は平仄を氣にせず古詩を書いてゐた。すなわち古詩には平仄の法則など無かつた。彼等はただ無意識のうちに「律句」を避けていたにすぎない。王漁洋・趙執信は直観によつてそれぞれ法則を發見、作例を収集した。こゝうは考えられないだろうか。それではなぜ王漁洋はそれを人にかくし、趙執信は公開したのであるか。趙執信の立場は明解至極である。彼は自分の理論が絶対に正しいと信じていた。

王漁洋にとつては古詩平仄論とは何だつたのだらう。おそら

うつしの詩學からゆらぎの詩學へ(下)

く「うつしの詩學」の核心部分であつただらう。核心であつたからこそ公開できなかつた。西歐に於いてある時代までギリシア語・ラテン語の文法は一種の密儀で、一般にはやたらと公開されなかつたと聞いたことがあるが、それと同様に古詩平仄論は秘中の秘とされ、ごく少數の弟子(例えば汪懋麟)にそれも一部しか公開されなかつたのである。また假に公開したとしても、「あんな窮屈な規則に従つて古詩を作るとはさすがに古文辭の後裔だ。」といつた激しい批判にさらされたに違いない。更に考えられることは、古詩平仄論につきまとう虚構性、無理につくりあげたという自覺が彼にはあつたのではなからうか。彼の詩風と同様、王漁洋の性格は重層的で複雑なものがある。かくて外・内それぞれの條件が整い、養生術の用語を借りれば築基の段階はこれでほぼ終つたことになる。いよいよ佳よろしき表現と、正しき聲律を組み合わせて習作を書けばよい。

古詩を作るには、須らく先ず體を辨わつべし。無論兩漢に至り難く、苦心摹倣するも、時に一塵を隔つ。卽もし建安を爲らば、六朝に一語をも墮落すべからず。三謝を爲らば、唐音を雜入すべからず。小詩には王韋を作らんと欲し、長篇には老杜を作らんと欲す。便ち應こたへに全く其の體を用うべくして、虎頭蛇尾なるべからず。此れ王敬美の五言古詩を論ずる法なり。予

向まむに同人に語る、譬うれば衣服の如し、錦なれば則ち全體皆錦、布なれば則ち全體皆布、半錦半布の理無しと、即ち敬美の此の意なり。又嘗て五言を論じ、感興は阮陳に宜しく、山水閒適は王韋に宜しく、亂離行役、鋪張敘述は老杜に宜し。未だ限るに一格を以てすべからずと。亦た敬美の旨と同じなり。

(池北偶談卷十二)

王敬美とは古文辭派後七子の大立者王世貞の弟王世懋であつて、彼が五言古詩の作法を論じた言葉を借りてきて、實際どのような過去の詩をうつけばよいかを、形式と内容からめて議論している。一方これは彼の自述でもある。秋柳詩では李義山風、江南では王維・韋應物風、四川では杜甫風と、様々な詩風のうつしを軽々とやつてのけていて、「虎頭蛇尾」の失敗作は少なくとも『漁洋山人精華錄』には一首も無いと言つてよい。これで習作までごぎつけたわけであるが、いよいよ書かれた詩が自立してゆらぎ始めて、讀み手の心を共振させることを目指す、「ゆらぎの詩學」に足を踏み入れよう。

六―ゆらぎの詩學

秀作・佳句をかぎりなく集めて拳拳服膺し、聲律をきちんと守つて習作を書く、ここまでではよいとして、それだけでは外見

上詩の格好をした文字の連なりが出来ただけである。それがゆらぎ出すにはどうすればよいか。

佛印禪師衆に謂いて曰く、昔雲門の説法は雲雨の如きも、絶えて人其の語を記録するを喜ばず。見れば即ちに罵しりて曰く、汝の口を用いずして反つて吾が語を記す。異時我を稗販し去らんと。學者の語言文字を漁獵すること、正に網を吹きて満たさんと欲するが如くにして、愚に非ざれば即ち狂なり。我輩の詩文を作るや、最も稗販を忌む。いわゆる汝の口を用いずして反つて吾が語を記する者なり。

(帶經堂詩話卷三微喻類所引居易錄)

漁洋は言う、これまで蓄積してきた知識をすべて捨ててしまふと。すべてを捨て去つたところからゆらぎの詩學は始まる。彼は自分自身模擬やしきうつし無しには近代の人間が詩を書けなことをよく知つていた。せっかく學んだ詩學を一旦意識下に忘れ去り、なにげなく詩を作りはじめなければならない。

南城の陳伯璣允衡、善く詩を論ず。昔廣陵に在りて予の詩を論じ、これを昔人の云う偶然書かんと欲すに譬う、此の語最も詩文の三昧を得たり。今人は連篇累牘、牽率應酬、皆偶然書かんと欲する者に非ざるなり。坡翁錢唐程奕の筆を稱して、人をして字を作さしむるに、筆有るを知らしめずと云う。此

の語も亦た妙理有り。(香祖筆記卷九)

ここまできて、王漁洋の「うつしの詩學」から「ゆらぎの詩學」への全體のプロセスが、李夢陽・何景明から王廷相へと連なる古文辭派の理論展開に酷似していることに氣づかれる人は多いであろう。特に李夢陽の「捨筏登岸」や王廷相の「古代からはじまつて各時代の詩風を十分に辨別してとらえ、詩の作り方を確立したのちにそれにとらわれずに詩作できるようになる。そこから更に『悟入』すれば、これまで學び蓄積してきたことすべてが化して自己の所有物となり、自在に創作することが可能になる。」(拙論「うつしの詩學からゆらぎの詩學へ(上)」百十五頁下段)という主張が連想される。王漁洋はさらに詩が自然に出てきてゆらぎ始める瞬間、そこにただよう香氣のようなものを「神韻」と命名した。

律句に神韻天然にして、湊泊すべからざる者有り、高季迪の白下山有りて皆郭を遶り、清明客の家を思わざる無し、程孟陽の瓜歩江は空しくして微かに樹有り、秣陵天は遠くして秋に宜しからず、の如きは是なり。余昔燕子磯に登り句有りて云う、呉楚は青蒼として極浦を分ち、江山は平遠にして新秋に入る、と。或いは亦た庶幾からんのみ。(漁洋詩話卷中)

前人の傑作絶唱を引用した後で、私の作品にもこういうものが

うつしの詩學からゆらぎの詩學へ(下)

ある、と自信作を擧げるのは彼の常套手段、もう一條見てみよう。

唐人の五言絶句は、往往にして禪に入る。意を得ては言を忘るの妙有りて、淨名の默然、達磨の得隨と同一の關捩なり。王裴の輞川集及び祖詠の終南殘雪詩を觀れば、鈍根初機と雖も亦た能く頓悟せん。程石隴絶句有りて云う、朝に青山の頭を過ぎ、暮に青山の曲に歇う。青山人を見ず、猿聲相續くを聽くと。予毎に歎絶し、以て天然にして湊泊すべからずと爲す。予少とき揚州に在りて、亦た數作有り。微雨青山を過ぎ、漠漠として寒煙織る。見ず秣陵の城、坐に愛す秋江の色。蕭條たり秋雨の夕べ、蒼茫として楚江晦し。時に一舟の行くを見る、濛濛たる水雲の外。雨後明月來り、照見す下山の路。人語溪煙を隔つ、借問す停舟の處。山堂法鼓振い、江月寒樹に掛かる。遙かに送る江南の人、鷄鳴帆を咿けて去る。又京師に在りて詩有りて云う、晨を凌して西郭を出で、招提微雨過ぎる。日出でて人に逢わず、院に滿つ風鈴の語。の如きは皆一時佇興の言にして、味外の味を知る者、當に自らこれを得べきなり。(香祖筆記卷二)

引用に出てきた漁洋自作の詩は、あまりに自然さをねらう餘り、かえって人工的な雰圍氣をただよわせてしまっている。鈴木虎

雄博士も、「漁洋の王、裴、を推すは固に善し。然れども其の近人と自己との作とを擧ぐるに於ては未だ得たりとなさず。彼蓋し古人に嚴にして近人に寛なるか。」(支那詩論史百九十三頁) また「王の寒煙織[△]といひ坐愛^{△△}といふ、織[△]の字は織に失し坐愛^{△△}は稚氣を脱せず、第二首江上の時見^{△△}の二字、一舟の一[△]の字、恐くは幼稚なり。…味外の味を知るものは此等の作には満足せず。」ととても嚴しい見方をしている。筆者は「稚氣」「幼稚」とは思わないが、王漁洋が自作の特徴として標榜する自然さとは微妙に異なっている氣がする。王漁洋という人はどのようにもがいてもトランス状態に入れない詩人であった。

洪昇叻思詩法を施愚山に問い、先ず余夙昔言詩の主旨を述ぶ。愚山曰く、子の師詩を言うは、華嚴の樓閣、彈指して即^たちに現るるが如し。又仙人の五城十二樓、縹緲として俱に天際に在るが如し。余は即ち然らず、室を作る者に譬うれば、瓴甃木石、一一須らく平地に就^つきて築起すべしと。洪曰く、此れ禪宗の頓漸二義なりと。(漁洋詩話卷中)

ここで王漁洋が施潤章の言葉を欣々と引用しているのは、これこそ私の作詩作法だと言いたいのであるが、實際の彼は「華嚴の樓閣」よりは地面に一つ一つこつこつ建ててゆくタイプであった。先に擧がっていたいくつかの絶句でも、ああしよう、こ

うしたらと、あれこれ考えた上で作られた作品であつたと思われる。その彼が自らの資質とはおそらく反對のゆらぎの詩學を指向するのだから面白い。筆者の抱く王漁洋像は、秋柳詩を書いて颯爽と登場した天才詩人ではなく、次のごときものである。王文簡公(士禎) 詩名當時に重けれども、粉署に浮沈せり。張文端公(英) 南書房に直し、代りて延譽を爲す。聖祖も亦た素より其の名を聞き、召し入れて面試す。漁洋は詩思本もと遅く、加うるに部曹の小臣を以て乍ち天顔を睹^み、戰慄して一字をも成すこと能わず。文端公詩草を代作し、撮^とりて丸と爲して案側に置き、漁洋は以て卷を完うすることを得たり。聖祖これを読んで笑いて曰く、人は言う王某の詩は手神多しと、何ぞ整潔なること殊に卿の筆に似るやと。文端公謝して曰く、王某の詩人の筆は、定めて當に臣に勝ること多許^{あまた}なるべしと。聖祖命じて詞林に改官せしめ、因りて高位に置かることを得たり。漁洋は感激終身、曰く、是の日張某微かりせば、余幾んど曳白せんと。(清朝野史大觀卷九)

康熙帝の面接試験であがつてしまい、白紙答案を出しそうになつた王漁洋は、けつしてすらすら詩句が出てくるタイプではなかつた。その彼が神韻の詩學―ゆらぎの詩學を標榜して大成功を収めた裏には超人的な努力があつたのである。彼が全力を擧

げてゆらぎの詩學に精進したのは、二十代前半の詩壇デビューから江南在任中の十年間であった。この時期の作品は秀作佳句の連続で、人々が記憶しているのもこの時期の作品が大半を占めている。ただし、それらの秀作佳句にはきわめてよく出来たアンドロイドのような人工的な雰圍氣がただよっている（そこが魅力になつてゐるような氣もするのだが）。これは王漁洋がゆらぎの効果を高めるために施したいくつかの仕掛けによるものである。

第一に、詩の表面を霞・微雨といったものの形をアイマイにするヴェールで覆いつくしてしまい、具體的な描寫を極力避ける。そこで色覺・聽覺・嗅覺といった言語になるべくよらない感覺的要素を導入することによって、具體的描寫を缺くにもかかわらずある種の臨場感を讀者に與える。第二に、地名を數多く詠み込むことによつて、それが喚起する言外のイメージを十分に利用し、作品が包含する情報量を出來るだけ増やす。第三に、たとえ現實とかけ離れていても、表現効果を上げるために、空間の構成や事物の組み合わせを虚構的に行なう、等である。第一の仕掛けについては何度かすでに論じたので本稿ではとりあげない。二・三については錢鍾書氏『談藝錄』にすでに指摘がある。蛇足を加えておくと、彼が江南時代に詠んだ詩には十

うつしの詩學からゆらぎの詩學へ（下）

中八九に何等かの華麗なひびきをもつた地名が使われている。例えば「年來腸斷す秣陵の舟、夢は繞る秦淮水上の樓」とうたい出される「秦淮雜詩」に出現する地名には、第一義的には山東の片田舎に生まれた文學青年が江南の文化に對して抱いていた焦げつくような憧れがこめられ、また少し視點をずらせば明朝滅亡に對するオマージュも見て取れる、といった具合で詩を作る側に立つてみればこれ程便利な道具は無いわけである。それを王漁洋はとにかく多用した。⁽²²⁾「余澹心寄金陵詠懷古跡詩卻寄二首」の第二首には云う、

鍾阜蔣侯祠 鍾阜 蔣侯の祠

青溪江令宅 青溪 江令の宅

傳得石城詩 傳え得たり石城の詩

腸斷蕪城客 腸斷す蕪城の客

この作品は「金陵詠懷古跡詩」に寄せたものなので餘計にそんなものかもしれないが、全篇地名のかたまり、觀光案内みたいな山人がいかに地名に執心していたかよくわかる。今のは極端な例であつたが、江南時代の作品はおおむねこのような傾向にあると言つてよい。この手法は後年四川に行つた際にも「嘉州にも也た復た西湖有り」（漢嘉竹枝五首その二）とやはり使われ

ている。第三の仕掛けについては王漁洋自身の非常に有名な言葉がある。

世に謂う王右丞は雪中の芭蕉を畫くと、其の詩も亦た然り。

九江の楓樹幾回か青き、一片の揚州五湖白しの如き、下は蘭陵鎮富春郭石頭城諸地名を連用するも、皆寥遠にして相屬さず。大抵古人の詩畫は、只だ興會神到を取る。若し舟に刻み木に縁りてこれを求むれば、其の指を失うなり。

(池北偶談卷十八)

王漁洋が、詩は現實を忠實に反映する必要は無く、「只だ興會神到を取」りさえすればよいと考えていたことは注目に値する。誰もがうすうす感じていても口には出せなかつたことをこまではつきり言つた人はいなかつたのではないか。王漁洋の詩に過剰に登場するかすみ・もや・霧・雨といったヴェールや、遠くかけ離れた地名の羅列はここに自らによつて肯定されたわけである。おそらく他の分野についても調査を行えば、彼の詩の虚構性はさらに明白になるに違いない。それを泉下の彼につきつけても「どこが悪い」と反問されるのがオチだろうが。

ともかくこれらの仕掛けによつて早くから彼の詩はゆらぎ出し、「天下遂に響然としてこれに應ず」(四庫全書總目提要)という大流行をみた。それ程彼の仕掛けは巧妙かつ自然なもので

あつた。最後に拙論「王漁洋詩論」でとりあげたいくつかの作品を材料にして再度検討してみよう。

縹緲涼天數雁鳴 縹緲たる涼天 數雁鳴く

幾家砧杵起秋聲 幾家の砧杵 秋聲起る

懷人江上楓初落 人を江上に懷えば楓は初めて落ち

臥病空堂雨易成 病に空堂に臥せば雨は成り易し

尺素經時常北望 尺素 時を経ては常に北望し

暮雲無際且南征 暮雲 際み無くして且つ南征す

沅湘一帶多兵甲 沅湘一帶 兵甲多し

莫動高樓少婦情 動かすこと莫かれ高樓少婦の情

さすがに「秋柳四首」を書く直前の作品だけあつて、この「聞雁」詩の隅々にまで彼の神經がゆき届いていることが傳わってくる。佳句の連続であるこの詩にあつて、特に「人を江上に懷えば楓は初めて落ち、病に空堂に臥せば雨は成り易し」の聯は平明にして美しく、自信のある對句であつたに違いない。「江上」は長江のほとりを指し、「沅湘」はその川上の沅水・湘水を言う。ここでは明王朝の殘存勢力や農民反亂軍・清朝派遣軍が抗争をくりかえしていた。これらの地名が喚起するイメージは戦争で、「江上」で病氣に臥した詩人が「高樓の少婦」にかわつて平和を祈るといふややくしい構成になっている。しかも王漁洋はこ

の時期山東に在つて、長江の影すら見ていない。直接この詩に關する發言ではないが、王漁洋をめぐる熱狂から一步はなれていた趙執信の見解を引いておくことは無益ではなからう。

司寇昔少詹事兼翰林侍講學士を以て、使を奉じて南海に祭告し、南海集を著わす。其の首章留別相送諸子に云う、蘆溝橋上より望まば、落日風塵に昏し。萬里茲自り始まる、孤懷誰か與に論ぜん。又た云う、此より去る珠江の水、相思斷猿に寄せんと。識らず、謫宦遷客更に何の語を作すや。其の次章與友夜論に云う、寒宵林酒を共にして、一笑窮途を失すと。窮途は定めて何許ならんや。所謂詩中に人無き者に非ずや。余曾て酒を吳門の亡友顧小謝以安の宅に被り、漏言して此に及ぶ。客坐適^{また}ま都に入る者有りて、司寇に謁^まえ、遂に以て告ぐるなり。斯れ則ち疏を致すの始めなるのみ。

(談龍錄)

趙執信の批判は一言でいえば、王漁洋の詩には本人が不在だということであろう。この批判はそれほどの外れではない。王漁洋の詩は確かに現實から離れているし、現存感も稀薄である。しかしそれは王漁洋がまさに意圖した通りのことであつて、彼の作品から人間臭が消え、「言志」が微妙・淡泊になればなる程、人々は彼に魅きつけられていったとも言えるだろう。彼の詩の

うつしの詩學からゆらぎの詩學へ(下)

ゆらぎの秘密の一端はこのあたりにもあつたのかもしれない。作詩人口が五十萬あるいは百萬人に達する近世中國の社會に、彼等の日常生活の範圍を越えた、言うべき「志」を持つた人間はごく少數であつたらう。残りの大多數の凡人達にとつて、王漁洋の作品は手輕に作れそうで、しかも高級感のある規範を提供したのである。

うつしからゆらぎの過程は王漁洋にとつても決して平坦なものではなかつた。眞實彼が自ら標榜する「神韻」の境界に達し得たのは、「王漁洋詩論」にも引いた「答鍾聖與送芍藥」詩を書いた六十二歳のおりであつた。

新緑横窗穩晝眠 新緑 窗に横たわりて晝眠穩やかなり

一簾微雨似輕煙 一簾の微雨は輕煙に似たり

午晴睡起維摩榻 午晴 睡りより起く維摩の榻

花氣薰人又破禪 花氣は人を薰じて又禪を破る

これを書いた時の王漁洋は詩人としては完全に下り坂で、三句目の「晴」が「仄平仄」と孤立していたり(四句目の同じ部分「平仄平」となつていて救われているのだが)、「花氣薰人又破禪」は黄山谷からの借り物というように、完全にゆるみきつている。ただこの詩に於ける肩の力の抜き方は尋常ではない。内容的には先に擧げた「聞雁」詩の第四句を四行詩に擴大した

ような形になっているが、王漁洋はもはや「佳句」「言志」といったしからみから自らを解き放ち、ただそこに存在することの喜び、横たわって午睡する幸せだけを書いている。彼の理論通り、神韻・ゆらぎはこれまでの研究や学習を忘れ、佳句の追及をやめた瞬間に詩人を訪れ、やがて去っていった。王漁洋はこの一作で追隨者達をはるか後方に引き離して詩人としての生涯を終えた。

七、結 語

これまでみてきた通り、王漁洋の詩論の源は山東の古文辭派にあった。箇體發生は系統發生を繰り返すと言うが、王漁洋の文學生活に於いて古文辭派の理論と實踐がすべて再生された。さらに錢氏の批判を顧慮しつつ、古文辭派がもっていた可能性を極限まで追及、そしてそれをも捨て去ってしまう「神韻」の理論を提唱した。彼はともかく時代の期待にせいっぱい答えた。「清秀なる李于鱗」とはかくも困難な事業を成し遂げた詩人に對するあまりに残酷な稱號であつた。

注

(12) 引用は郭紹虞撰『滄浪詩話校釋』（人民文學出版社排印一

九八三年八月第二次印刷本）による。

(13) 丁福保輯『清詩話』（上海古籍出版社排印一九七八年九月新一版）所収本。

(14) 一九八二年中華書局據康熙四十年文粹堂刊本排印本。

(15) 『清詩話』所収本。

(16) 『清詩話』所収本。

(17) 東方學第七十三輯所収。

(18) 『清詩話』所収本。

(19) 一九八二年上海古籍出版社據康熙四十四年序刊本排印本。

(20) 弘文堂刊昭和二十九年第六版。

(21) 一九八一年上海書店據中華書局一九三六年排印本景印本。

(22) 四部叢刊所収康熙四十九年跋刊本『漁洋山人精華錄』による。

(23) 女子大文學國文篇第三十九號所収。

(24) この詩、不思議にも單行本『漁洋山人精華錄』には収められず、『訓纂』『箋注』には入っている。